

惑星社会における「日常生活の網の目」の探究

——“うごきそのものへ”にむけた方法論の検討——

鈴木鉄忠

Exploring Networks of Everyday Life in the Planetary Society: Methodological Examination for “Movement Itself”

SUZUKI Tetsutada

This article tries to elaborate a methodological framework for understanding the potential for social movement in networks of everyday life. Based on the discussion of the “planetary society” (Melucci 1996) – a society completely interdependent on itself, but still constrained by being on the planet Earth and the biological structure of human beings – our research group proposed a holistic approach to the multiple problems of the planetary society and to the possibility for a “living knowledge”. We first discussed the importance of networks of everyday life in the contexts of social movement research and community research. Second, we examined concepts of the “long duration” and “structures of everyday life” raised by the French historian Fernand Braudel to capture the components and construction of everyday life as well as possible. Finally, we highlighted implications for further investigation into a “movement itself” in the planetary society.

キーワード：惑星社会, 日常性, 全体史, 長期持続, 出来事, 変動局面, 社会運動

1. 問題設定——惑星社会と日常生活の諸相

本稿は、共同研究チームの新たな主題「惑星社会と臨床・臨場の智」の下に、惑星社会における“うごき”を捉えていくための方法論の錬成を課題としている。共同研究チームが取り組む“うごきそのものへ”というライトモチーフは、イタリアの社会学者アルベルト・メルッチの惑星社会論を理論的支柱としながら、次のような現代社会の認識が土台となっている。

現代の社会生活では、宇宙空間から海底まで、そして、神経系から遺伝子まで、人間の力によって変更可能な範囲が拡張している。こうした事態は、既存のグローバリゼーション論から

はしばしば見過ごされる次のような重要な社会変化を引き起こしている。すなわち、社会の基盤である地球 (globe) の表面のみならず、惑星地球の「外部」である宇宙空間やその「深部」である海底へも相互依存が拡大している。そうした相互依存の惑星化は、自然界の限界まで達しており、社会は自然界をその内部に包摂するようになっていく。にもかかわらず、私たちの社会生活は、惑星地球の物理的限界と身体の有限性を克服することはできない。なぜならば、地球以外の場で社会は存立できず、身体なくして私たちは存在できないからである。それによって、私たちの日常生活では、可能性と限界の緊張が常態化している¹⁾。

メルッチは、「惑星社会」という概念を提示することによって、社会的行為の可能性のグローバルな拡大とそれに伴う相互依存と、しかし依然として、たったひとつの惑星地球と身体に私たちの社会生活が拘束される事実を捉えようとした。惑星社会では、種の存続と種の進化のために侵犯してはならない惑星地球と身体との結び目を認識することによってはじめて、支配的な論理とは異なった「世界の名付けと意味付け」をする可能性がでてくる。そして、そうした試みは、政党や組織や知識人からではなくとも、「普通の人びと」の「日常生活」から始めることができることを示唆した²⁾。

「3.11」が突きつけた現実、惑星地球の存続と個々人の生存を根底から揺るがす事件が「想定外」に生起するにもかかわらず、従来の認識枠組みに依拠したままでは有効な処方箋を見出せないということだった。文明の岐路、転換期、危機の時代という感覚をうつつらとは抱くものの、惑星社会の存続と人びとの生存を損なう圧倒的な現実が在り続けていることを、思い出しは忘れていく。こうした状況のなかで一般理論ではなく、予測困難な危機が頻発する時代に力を発揮する社会理論、そして調査研究の認識論と方法論をどのようにつくっていくか。これらが共同研究チームの共通の課題として浮かび上がってきた。求められるのは、体系的な時代診断学 (Zeitdiagnostik) というより、日常性のなかに存在しているが私たちがしばしば気づかないまま見過ごす徴候 (symptoms) を捉えるような方法論をつくる試みである³⁾。

こうした問題把握を踏まえて、本稿では惑星社会における「日常生活の網の目」の探究を可能とするような方法論の検討を行う。惑星社会において、「想定外」とされる大事件の徴候はすでに日常生活に現れており、また、新たな問題を提起する可能性もこの日常生活が出发点となる⁴⁾。ここでは日常生活の諸相の考察を深めていくために、フランスの歴史学者フェルナン・ブローデルの時間論と「日常性の構造」の議論を取り上げる。社会学のなかで日常性の主題は、日常と非日常、生活世界の認識論的な構造に関する知見が蓄積されている。そのため産業社会以前の地域や経済のうごきを主題としたブローデルの議論と共同研究チームの課題は、距離があると思われるかもしれない。しかしながら、後述するように、ブローデルは最初の大著『地中海』や最後の主著『物質文明・経済・資本主義』のなかで、地域社会の構成要素の存在論的なオーダーを可能な限り解き明かした。ブローデルのホーリスティックなアプローチは、惑星

社会の「縮図」としての地域社会の全体把握を目的とした方法論の錬成に際して、重要な示唆を数多く提供している。またブローデルの「長期持続」および「日常性の構造」の議論は、惑星社会の物理的な限界の認識のために重要な問題を提起していると同時に、社会運動の持続性についても新たな視点を与えてくれる。

本稿の構成は、第2章において社会運動論に位置付けて、「日常生活の網の目」に着目する意義を論じる。とりわけアルベルト・メルッチの集合行為論における動員と運動の区別という見解に焦点をあてる。第3章では、ブローデルの時間論を取り上げる。第4章ではブローデルの「日常性の構造」を検討し、時間論のなかでの位置付けを考察する。最後に本稿の議論を整理し、残された課題を確認する。

2. 社会運動と「日常生活の網の目」——可視的な動員局面と潜在的な運動局面⁵⁾

アルベルト・メルッチは集合行為論のなかで、早い時期から日常性の重要性を論じてきた。動員と運動の区別⁶⁾、すなわち「出来事」「事件」として集合行為が可視化される動員の局面と、日常生活の網の目のなかの潜在的な運動の局面とを区別した。可視性と潜在性が相互に関連し合う点に着目する視点は、運動組織や因果関係に分析の焦点をあてるパラダイムと異なり、個々人の体験と循環関係を重視するメルッチの独自性がよく表れている。

可視的な動員局面と潜在的な運動局面の区別は、メルッチが集合行為論を本格的に展開した1980年代初めの「中期」の作品から「後期」と「晩期」の作品まで、以下のように繰り返し取り上げられ、議論されている⁷⁾。

潜在性と可視性は、運動の恒常的な2つの条件である。それらは一方から他方へと継続して移動していく。これらの推移において、ある行為主体は姿を消し、ある人々は姿を現わす。そして制度化と近代化のプロセスを強めていく。しかし、また新たな問題が生まれ、新たなコンフリクトの地平が表面化するのである⁸⁾。

動員と運動には大きな違いがあるのである。多くの研究者が共通して誤解しているのは、運動の政治的効果や組織戦略を、動員の集合的な形式として言及することである。動員とは特定の問題に関して展開されるものであって、運動とは別次元のものである。運動は、日常的な社会的関係のネットワークのなかに、時間や空間を再獲得する能力と意志のなかに、あるいはオルターナティブなライフスタイルを実践する試みのなかに、息づいている⁹⁾。

私たちは相対的に持続するネットワークの形態と、動員と闘争が起こる特定の瞬間を区別しなければならない。それらはますます循環的なサイクルを描く。前者は日常生活と密

接に結びついており、運動にかかわる参加者の欲求とアイデンティティに関連している。後者は潜在性のなかで準備され育まれたポテンシャルを可視的な集合行為に変えていく。隠れされた構造によって生じる分子レベルの変化は、「私的なこと」や残余的な事実と見なすべきではない。それは動員を可能にする条件なのである¹⁰⁾。

社会運動はそれらが公的な存在となる可視的レベルに限定されるべきではない。たしかに運動の存在、その持続性、そして生み出される集合的な効果にとって、可視的なレベルは不可欠ではある。しかし、行為の存在理由とその根源がそこで構築されるわけではない。そうした行為の深い根源と理由は、水面下の網の目のなかに潜んでいる。そこでは公的な動員とともに顕在化するすべてのものがすでに存在しており、すでに構造化され、名前をもつ¹¹⁾。

以上の議論には、出来事や事件が起こる瞬間 (Eventful moments) の可視的な動員局面だけでなく、それらが起こる以前および以後の時期 (Eventless moments) の運動の局面を分析的に区別する重要性が繰り返し主張されている。ではなぜこの区別が重要なのだろうか。それには少なくとも2つの理由があると思われる。その1つは、現代社会における社会運動の重要な役割とは何か、という認識に関わる。

現代の社会運動は「異なった方法で世界を名付ける」可能性を導入した。それは、権力の使用する語法や言説とは相容れない用語によって、社会生活における認知的および対人関係の枠組みを再定義する可能性である¹²⁾。

現代社会のコンフリクトは、階級闘争や資源や権利の獲得ではなく、世界を名付けることをめぐって展開する¹³⁾。社会運動は、世界に対する支配的な定義とは異なった世界の名付け方を提起する。そして、いつどこで異なった方法で世界を名付ける可能性が現れるかといえば、それは「水面下の網の目のなかに潜んで」おり、「そこでは公的な動員とともに顕在化するすべてのものがすでに存在しており、すでに構造化され、名前をもつ」¹⁴⁾のである。動員局面ばかりを見ていては、世界の異なった名付け方は認識できない。世界を再定義する可能性は、すでに運動局面に現れている。それゆえに動員とは区別して運動を捉えることが必要になる。

もう1つの理由は、集合行為に参加する人々の運動に対する意味付けを説明するためである。伝統的な運動論では、政党や労働組合といった公認された組織団体が動員の主役であることがしばしば前提とされていた。しかし現代の集合行為は、多種多様な行為主体が離合集散を繰り返す、その都度の連帯ネットワークを形成しながら展開していく

個々人のレベルと日常生活の水面下の網の目のなかでは、名付けと意味付けを行うプロセスが現れる。この側面こそ、現代の社会運動において最も重要なものである¹⁵⁾。

人びとは、一人一人の内面のなかで¹⁶⁾、そして「日常生活の水面下の網の目」という社会関係のレベルにおいて、集合行為への意味付けを行っている。世界への意味付けと名付けが行われる場が、日常生活の網の目ということになる。

残念ながらメルッチは2001年に夭折し、これ以上議論を展開することが叶わなかった。そのため運動局面と日常生活の諸相に関するさらなる検討は、メルッチの仕事を継承する試みのなかで行われている¹⁷⁾。次章では「日常生活の網の目」の検討をブローデルの時間論と日常性の構造の議論に依拠しながら行っていく。

3. F. ブローデルの時間論——「短い時間」「変動局面」「長期持続」

3.1 全体史という認識論、時間層の分節化という方法論

ここでは、前章におけるメルッチの動員と運動の区別の論点を念頭に置きつつ、フェルナン・ブローデルの時間をめぐる議論を検討する。

よく知られているように、ブローデルの認識論は「全体史」である¹⁸⁾。これは彼のどの著作でも登場する認識論的な姿勢である。初期の大著『地中海』では「まさに私はこの広大な海の現前をできる限り再現するように努力してみた」¹⁹⁾と述べているし、『歴史学入門』では「それ〔経済史：引用者挿入〕は、ある一つの観点から見た人間の全体史である」²⁰⁾と語っている。また『物質文明・経済・資本主義』のなかでも「わたしのもくろみは終始一貫して、見ることであり、また見させることであった。そのさい、ここに取り上げた数々の光景にたいし、まるごとの厚み、まるごとの複雑性、まるごとの異質性を保たせるように心がけた。これらの性質は生命そのものしるしだからである」²¹⁾と書いており、「すべてを見るといわぬまでも、すべてを位置付けたかったのである」²²⁾と繰り返し述べている。フランスのリセの学生にむけた講義録『文明の文法』では、歴史のケーススタディに対して、「全体的な歴史解釈の試み——たとえば文明史のような試み——では、太陽光線のスペクトルのさまざまな色をしかるべく混合すると必然的に白色光がつくられるように、露出時間をさまざまに変えて幾枚もの写真を取り、そのうえでそうした多様な時間と図像とを統一してまとめなければならない」²³⁾と述べている。

しかしながら、「全体」をもれなく認識することは、不可能に近い。当然ながらそのことをブローデルは十分に自覚し、その限界にもふれている²⁴⁾。そうだとすれば問うべきは、「全体」の認識を可能な限り達成するような方法論とはいかなるものか、ということになる。それが時間を複数の層に分節化するというブローデルの独創的な着想だった。ブローデルは『地中

海』において、「地理学的な時間」「社会的な歴史」「個人の時間」という3つの時間層を区別した²⁵⁾。その後、『アナル』誌上に掲載された論文「歴史と社会科学、『長期持続』」(以下、「長期持続」論文と略す)のなかで、「長期持続」「変動局面」「出来事」と再定式化した²⁶⁾。その後の著作においても、多少の意味の変化はあるが、次のような基本的な視点は変わっていない。

われわれの考えでは、社会的現実の中心において、瞬間という時間とゆっくり流れる時間との間にある、激しく、濃密で、無際限に繰り返される対立ほど重要なものはない。過去を扱うにせよ、現在を扱うにせよ、このような複数の社会的時間について明確に意識しておくことは、人間科学全体に共通の方法論にとって、必要不可欠なことである²⁷⁾。

「瞬間という時間」と「ゆっくり流れる時間」との間において、矛盾をはらんだ社会過程が展開している。社会生活のどのような場面でも複数の時間層の対立を見出すことは、歴史学のみならず、人間科学全体の課題であるとブローデルは主張した。

3.2 出来事、「短い時間」

3つの時間層とは具体的にどのようなものか。ブローデルが「瞬間という時間」と見なすのは、伝統的な歴史学が扱ってきた「出来事 (événement)」である。出来事は「爆発的」で『「やかましい知らせ」』であり、「同時代人の意識を過剰な噴煙で満たすが、その炎が見えたとなん、すぐ消え去ってしまう」²⁸⁾ものであり、「個人の、日常生活の、われわれの想念の、われわれの素早い意識下の尺度の時間であり、とりわけ時評家やジャーナリストの時間」²⁹⁾である。それはいわば、新聞記事やニュースとして収まるような時間幅であり出来事史、事件史、政治史などと呼ばれる。ブローデル自身は「短い時間 (tempo breve)」³⁰⁾と呼んでいる。このなかには、歴史的に大きな出来事や事件も、日常生活の些細な出来事や事件も含まれる。「したがってそこには、政治はもちろんのこと、経済、社会、文学、制度、宗教、さらには地理 (強風や嵐)をも含めた、生活のあらゆる分野に関する短い時間が見出される」³¹⁾ことになる。

「短い時間」の議論で1つ注目しておきたいのが、「小さな出来事」に対するブローデルの高い関心である。というのも、この「雑事」に対するブローデル的な着眼点が、地域社会のフィールドから「長期持続」を発見する1つの方法を示唆するからである。『物質文明・経済・資本主義』では、「大きな出来事」に対するブローデルの関心の低さは以前と変わらずだが、「小さな出来事」への関心はきわめて高い。

観察対象としての時間を微細な分刻に狭めるときには、出来事に、あるいは雑事に行き

当たる。出来事は、唯一無二と思われたがり、またそのつもりでいる。雑事は繰り返され、そして繰り返されるうちに一般性となったり、より正しくは構造となったりする。それは、社会のあらゆる階に入りこみ、際限なく温存されつづける生活様式および行動様式の特徴をなす³²⁾。

いくつかのエピソード、偶然起こったこと、旅行記のなかに、「ひとつの社会の姿がありありと見えて」くるのであり、「社会のさまざまな階における食べ方・着方・住み方は、けっしてどうでもよいで済ましようことではない³³⁾」と強調する。たとえば、オーストリア大公マクシミリアンが大皿に盛られた料理を素手で食べている姿を描いた絵にブローデルは目を止める。そして16世紀初頭当時のヨーロッパでは、いまだ上位の社会層にも行儀のよい食事作法が広まっていなかったことを推測している。

雑事への着目は、『物質文明・経済・資本主義』の「訳者あとがき」で紹介されているブローデルの語りのなかでより明らかである。

わたしはというと、何度でも繰り返されるものだから評判にならない、たんなるフェ・デイヴエール雑事のほうが好きなんです。そのばあい、そういう雑事は、長期的な現実の指標になる——それも、みごとなまでにですよ——つまり構造の指標になることができます³⁴⁾。

ブローデルにおいて、「短い時間」から「長期持続」へ、細部から全体へという認識を生み出しうるのは、「雑事」が常に「全体」のなかに位置付けられているからである。マクシミリアン大公が大皿に素手を突っ込んだという雑事をデータとして発見できるためには、食事や礼儀作法を含むヨーロッパ文明の「長期持続」をめぐる認識が前提となっている。

3.3 変動局面

「短い時間」と「長期持続」のあいだに位置するのが「変動局面 (la conjuncture)」(あるいは「複合状況」とも訳されるもの)である。この時間層は、主として経済の動向を軸に測られた時間である。「変動局面の、周期の、さらには『間周期的な』【叙述】」であり、「10年という時間、四半世紀という時間、さらには、最大限に見れば、古典的な、半世紀という時間幅の選択を提示する³⁵⁾」。あるいは百年単位の経済変動が含むこともある³⁶⁾。

しかしながらブローデルは、価格や景気といった経済の動向だけを想定しているのではない。この点は『地中海』で顕著である。「経済的でない情勢は、その持続期間そのものによって測定し、位置づけられるべきである³⁷⁾」と述べ、百年単位で持続するものとして、人口動態、国家や帝国をめぐる地政学、社会の流動性、産業成長力、工業化の進度、国家の財政、戦争など

を例示している。

「変動局面」の議論で注意したい第1の点は、時間層内部の複数性である。ブローデルは「変動局面」が厳密に確定できるとは考えておらず、ある程度の幅や厚みを想定している。「ただひとつの変動局面があるのではなく、複合的な状況、すなわち達成されつつあるいくつもの歴史の幅がある」のであり、「ただひとつの単純な、また経済情勢の要請と論理的帰結を伴って認めるだけで十分であるような経済情勢はない」と述べる³⁸⁾。それゆえどの時間幅とするかは、個別の分析や対象を確定したうえで、分析者が設定しなければならない。

第2に注意したい点は、「変動局面」のなかに経済の情勢と社会の動向の両方が含まれていることである。それによってこの時間層の幅や厚みはいつそう複雑になっている。『地中海』の段階では、ブローデルの強調点は社会史へ向けられていたようにも見える。たとえば、「ここではすべては人間から、人々から出発するのであって……事物をもとに人間がつくったものから出発する」³⁹⁾と述べているように、人間集団を単位とした時間幅が想定されていた。しかしその後の「長期持続」論文や『物質文明・経済・資本主義』の議論では、「変動局面」は主に経済情勢に焦点があてられる。社会史は次に述べる「長期持続」「構造」のなかで議論されているようにも見える。たとえば『地中海』では「変動局面」として言及された人口動態は、『物質文明・経済・資本主義』では「長期持続」にあたる「日常性の構造」のなかで議論されている。よって、第1の点と同様に、分析者が何を明らかにするかによって、社会経済の歴史の時間幅を設定することが必要といえよう。

3.4 長期持続

3つの時間層のなかでブローデルのもっとも独創的な見解は「長期持続 (la longue durée)」だろう。「長期持続」論文では「構造」という用語を採用しながら説明している。そこで構造とは、「時間を経ても摩耗することがなく、時間によってゆっくりと伝達されてゆくような一つの現実」であり、「構造のうちのあるものは、長く持続してゆくうちに、無数の世代にとって安定した要素になってゆく」⁴⁰⁾ものと説明される。しかしながら、この概念を実際の調査研究に適用しようとするのは、容易なことではないことに気づく。それがこの概念の豊かさと同時に混乱をもたらす特徴であり、問題解決というよりも問題提起を触発し議論を巻き起こすものとなってきた⁴¹⁾。

「長期持続」の議論で注意したい第1の点は、この時間層でも相当な幅をもった厚みが包含されていることである。地理的な諸条件や気候のようにほとんど不動といってよいものから、心性、文明、文化、都市、道路や交通のようなある程度もしくはかなりの程度の可動性を内包したものが含まれる。『地中海』では、「ほとんど動かない歴史……人間を取り囲む環境と人間との関係の歴史……ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し、しばしば回帰が繰り返され、絶

えず循環しているような歴史⁴²⁾のように、主に地理や環境を念頭に「長期持続」が議論されている。その後の論稿では、そうした地理学的な時間というより、人間や人間がつくりだした事物を単位とした物質文明、あるいは日常性の構造と呼ばれるものも「長期持続」のなかに含まれる。よって、世紀や世代をまたいで連続していくような自然と人間と事物の単位が、この時間層のなかに位置付けられているといえよう。

注意したい第2の点は、長期持続は不動性を意味するわけではないということである。たしかに「持続」や「構造」といった用語は、可動性や可変性よりも、不動性や不変性の意味合いを強くする。しかし長い時間の持続性は、他の2つの時間層と比べたときに、不動性が際立つということであって、ここでも全体性のなかで長期持続を考えるという認識論が重要になっている。したがって長期持続は、「動かざる歴史」ではなく「規則性」であり、「動きの反復」と理解する方がより正確である⁴³⁾。

3.5 3つの時間層の連関

それではブローデルの3つの時間層は互いにどのように連関しているのか。経験的な調査の際にはどのような審級によってそれらの時間層を区別し、分析するのだろうか。長期持続が重要視されているとはいえ、それが他の2つの時間層を決定するのか。それとも時間層間の相互作用を認めるのか。それらの点について、ブローデルは掘り下げた議論をしているわけではない⁴⁴⁾。ただし「長期持続」論文のなかでは、3つの時間層の関係付けが簡潔にはあるが言及されている。

ときには動きが止まっているか見えるほどまでに進行が緩慢になった時間に親しむことだ。のちに触れる別の段階ではそうはいかないが、この段階では、歴史において支配的な時間を棄てて、そこから離れて、異なった不安や問題をはらんだ別の視線をもってまたそこにもどる、というのが正しい態度である⁴⁵⁾。

まずブローデルは、出来事中心の「短い時間」を一度は棚上げにし、明示的に取り上げられない長期の時間層に慣れ親しむことを勧める。その作業の後に、違う視点をもって再び同じ出来事に戻るといっているのである。一見すると「遠回り」に見える選択をなぜ行うのか。

とにかく、歴史の全体がいわば下部構造から再検討されることが可能になるのは、この緩慢な歴史の層との関係においてである。歴史の時間をなすあらゆる段階、無数の段階、無数の断片は、この深層部、このほとんど不動のものを起点にして理解される。すべてがこの周囲をまわっているのである⁴⁶⁾。

ブローデルは、時間層の基部となる具体的な下部構造 (una infrastruttura) に身を置いて、そこから歴史の全体性 (la totalità della storia) を理解しようとする。ここには、全体史という認識論と長期持続という方法論が密接に関係していることがよく表れている。

しかしながら、ブローデルは長期持続からすべてを説明しようと主張しているわけでは必ずしもない。たとえば「長期持続」論文では、「私の見るところ、これらさまざまな歴史学のうちたった一つを選んで、他をすべて排除するのは誤りである」と述べている⁴⁷⁾。ブローデルにとっては、「全体」の布置連関を把握することが最重要である。

この研究のすべての段階において、長期の運動 (movimenti lunghi) と短期の発作 (pulsioni brevi) とを区別する必要があるだろう。後者は直前の原因から (nelle loro cause immediate), 前者は遠い過去のきっかけから (nella traiettoria d'un tempo più lento), それぞれ把握されなければならない。〔中略〕 いかなる「現在 (attualità)」も、異なった起源と異なったリズムを持ったさまざまな運動の集積である。今日とは、昨日でもあり、一昨日でもあり、昔でもあるのだ⁴⁸⁾。

ここには複数の時間層との関係がごく手短にだが言及されている。「短期の発作」、つまり出来事や事件はそれに直近する出来事や事件によって把握すること、そして「長期の運動」、つまり「変動局面」と「長期持続」を含む時間層は、それらに先行する緩慢な時間の軌跡をたどりながら把握すること、という方法が述べられている。ただしこれ以上ブローデルは議論を展開しておらず、管見の限りでは、その後にもこの点が明確化された箇所を見出すことはできていない。この時点では、現在を「短い時間」と「長期持続」「変動局面」を区別して認識しつつ、それらの時間層間の緊張関係を分析者の目的に応じて経験的に再構成する、という点を確認しておく⁴⁹⁾。

4. 「長期持続」と「日常性の構造」

4.1 経済領域のなかの「日常性の構造」

前章で見てきたように、ブローデルの時間層には、相当の「厚み」があることがわかる。「短い時間」「変動局面」「長期持続」という3つの時間層は、現実にはそれらが1つの全体として成り立っており、各時間層が相互に影響し、時間層内部においても異なるリズムを持った時間の流れが重なり合っている。

では、後期の大著『物質文明・経済・資本主義』で展開される「日常性の構造」はブローデルの時間層の議論にどう位置付けられるのか。この著作で焦点があてられたのは、15世紀から18世紀の産業化以前の主にヨーロッパ経済史の長期持続と変動局面である。ここでブローデル

は、『物質文明・経済・資本主義』という題目に表現されている通り、3つの「階段」からなる経済領域の全体を描きだそうと試みた。その最下位に位置するのが「物質文明」「物質生活」という名の自給自足の領域であり、ここに「日常性の構造」という慣習的行動を原理とする領域が広がる。その上の階には、交換価値を原理とした市場経済の領域が小規模なものから大規模なものまで積層されている。そして最上階には、市場経済に寄生するようにして、世界の不平等を糧にしながら資本主義経済の領域が展開している。ブローデルはこれらの3つの領域が、歴史的に段階を経て出現してきたという説を拒否し、それらの同時性、共時性を強調する⁵⁰⁾。そして最上階の資本主義がすべてを取りこむことはなく、市場経済のみならず、物質生活の領域もしぶとく持続することに注意を促している⁵¹⁾。

このように「日常性の構造」は、経済生活における交換価値や資本主義経済における不平等を糧にした利潤の最大化の領域と区別され、2階および3階とは異なる原理⁵²⁾が浸透している広大な領域と理解される。

4.2 日常性の構造の位置付け

では「日常性の構造」は前章で検討したブローデルの時間層の議論にどのように位置付けられるか。これが「長期持続」に位置付けられることは、次のようなブローデルの「日常性の構造」の説明からほぼ明らかである。

人間は腰の上まで日常性に浸かっているのだと私は思う。今日に至るまで受け継がれ、雑然と蓄積され、無限に繰り返されてきた無数の行為、そういうものがわれわれが生活を営むのを助け、われわれを閉じ込め、生きている間じゅう、われわれのために決定を下しているのだ。こうした行為を行わしめる刺激、衝動、模範、様式、あるいは義務は、われわれが思っている以上に多くの場合、人類史の起源にまで遡るのである。非常に古く、しかもなおしかもなお生き生きとした何世紀をも経た過去が、アマゾン川が大量の濁水を大西洋に流し込んでゆくように、現在という時間の中に流れ込んでいるのである⁵³⁾。

『地中海』や「長期持続」論文と異なる特徴は、「日常性の構造」の議論を通じてブローデルは、長期持続のなかの物質性を詳細かつ具体的に明らかにしたことだろう。

日常性とは、時間および空間のなかに紛れて、ほとんど目につかないこまごまとした事実である。観察の空間を狭めれば狭めるほど、物質生活の環境そのものに取り囲まれる機会がいつそう多くなる⁵⁴⁾。

『物質文明・経済・資本主義』のなかで展開された日常性への着目は、産業化以前の世界における可能なことと不可能なことの境界をできる限り確定していこうとする途方もない試みの、方法論的な第一歩だった。ブローデルは15世紀から18世紀の世界を対象として、この時代の可能事のリストを作成しようとした。それが「日常性の構造」の目次を構成する8つの章立てになっている。章と節に限れば、『日常性の構造』は次のような構成である。

第1章 数の重量

世界の人口——案出すべき数字；参照用スケール；生物学的旧制度は18世紀とともに完了する；弱小者に対抗する多数者

第2章 日用の糧

小麦；米；とうもろこし；18世紀の食品革命；そして世界のほかの土地では？

第3章 余裕と通常——食べ物と飲み物

食卓——贅沢と大衆的飲食物；飲み物と《興奮剤》

第4章 余裕と通常——住居・衣服・流行

全世界の家屋；室内；服装と流行

第5章 技術の伝播——エネルギー源および冶金

鍵となる問題——エネルギー源；鉄——貧乏な親類

第6章 技術革命と技術の遅れ

三大技術革新；遅かった輸送；技術史の扱いにくさ

第7章 貨幣

不完全経済と不完全貨幣；ヨーロッパの外側では——揺籃期における経済と金属貨幣；貨幣のはたらきの規則若干；紙幣と信用用具

第8章 都市

都市自体；西ヨーロッパ諸都市の独自性；大都市

「長期持続」のなかでの「日常性の構造」の位置付けという点に限定していえば、いくつかの点を指摘できる。第1に、『地中海』と『物質文明・経済・資本主義』を読み比べたとき、後者には「環境の役割」にあたる事項が取り上げられていない。この点は二者が扱う対象が違うという事情が影響しているためだろう。後者は全世界を対象にしているために、前者で全面的に展開された「長期持続の地理性」は正面に出てこない。しかしながら、地理性に関する観点が過小評価されているわけではなく、複数の主題のなかに組み込まれている⁵⁵⁾。

第2に、『地中海』では十分に論じられないかまったく言及がないが、『物質文明・経済・資本主義』では正面から議論されているものがある。少なくとも3点挙げられる。まずは「人間

の単位」である。人口を主題として、それに影響を与える様々な要因が検討される。注目したいのは、数量やデータとして人口を対象化するのみならず、その時代の等身大の人間の単位に照準した人口動態の考察が展開されることである。たしかにブローデルは第1章を「数の重量」と題している。しかしながら、数そのものというより、死亡率や伝染病といった生物学的な諸条件が検討される。また文明や都市と関連させて、人びとの移動と定着が説明される。次に、先にも述べたが、「物質性」である。まず人間を論じ、その後にブローデルは人間がつくり出した事物を検討する。飲食物、衣服、住居から、技術、貨幣、都市に至るまで、物質的な諸条件との関連で論じられる。さらに「社会の階層性」という観点である。人間集団内部における日常性の構造は、裕福な社会層と貧しい社会層によって決定的に異なる。「余裕と通常」という主題のなかで、ブローデルは衣食住から寿命に至るまで、日常生活の構造における「持てる者」と「持たざる者」の格差を論じている。

第3に、『地中海』でも『物質文明・経済・資本主義』でも共通して検討された主題がある。それが都市と交通である。前者において都市は地理学的時間の最後の「人間の単位——交通路と都市、都市と交通路」として位置付けられるのと同様に、後者においても都市は日常性の構造の最後に位置する。ブローデルは都市を自己完結したものとしてではなく、ある全体のなかでの都市のあり方を論じている。なぜ「長期持続」のなかに都市が位置付けられるのか。ブローデルは貨幣と並んで都市のなかに日常性と変動の2つの相反する現実があることに着目している。

真実のところは、貨幣と都市とは、太古の日常性の中に、そして同時にもっとも新しい近代性の中に潜り込んでいるからである。貨幣は、それを交換を促す手段すべてを指すものと解すれば、非常に古い発明である。そして交換のないところには、社会も存在しない。都市もまた、先史時代から存在する。それはもっとも日常的な生活の構造、その何世紀にもわたる歴史的な構造である。だが、それはまた、変化に適応し、それを強力で推し進めることのできる増殖装置でもある⁵⁶⁾。

『地中海』における都市と交通、『物質文明・経済・資本主義』における貨幣と都市の位置付けをみると、都市と交通と貨幣が「長期持続」と「変動局面」とが交差する局面にあり、2つの時間層を媒介する領域にあることがわかる。

以上の点を考慮すると、3つの時間層における日常性の構造の位置付けは、図-1のように仮説的に設定することができよう。「日常性の構造」は、超長期的な規則性をもった自然の単位の時間幅より短い。自然の単位の周期と近い日常性の構造は人口を基準とした人間の単位である。そして人間がつくった事物、技術が続く。そして日常性と同時に変動の契機をもつ貨幣

図-1 F. ブローデルの3つの時間層と日常性の構造

長期継続	自然の単位		地理学的時間：山地／高原／平野／海原／沿岸地帯／島／砂漠 気候：季節／気候変動
	人間の単位 物質生活	人間	人口変動／飢饉・流行病・ペスト／部族・文化・文明 日用品の糧：小麦／米／とうもろこし／18世紀の食品革命／鉄 食物、贅沢と常用：食卓、礼儀作法、贅沢食と常用食、肉食、塩、乳製品、・死亡・卵、海産物、たら漁、胡椒の流行の終焉、砂糖の席卷
		事物	飲物、贅沢と常用：水、ワイン、ビール、リンゴ酒、蒸留酒、チョコレート・茶・コーヒー、たばこ 衣服と住居、流行と常用：建築材料（石・煉瓦・木材・土・布地）、ヨーロッパ農村住居、都市住居、都市化した農村、インテリア（家具・床・壁・天井・戸・窓・暖炉）、調和と利便性、贅沢と安楽、服装と流行
	日常性の構造	技術	技術伝播：エネルギー源、人力、家畜、水力・風力、帆、木材、石炭、鉄と冶金術、ほかの金属 技術革新：三代技術革新、火薬、銃、大砲、印刷、活字、外洋航海技術の遅れ一遅かった輸送、固定した道筋、陸路・海路の盛衰、舟運、取るに足らない速度・輸送量、輸送業者、経済の限界、技術史—技術と農業
交差局面	貨幣		貨幣：不完全経済と不完全貨幣、原始的貨幣、物々交換、貨幣のはたらき、貴金属、蓄財、紙幣と信用
	都市と交通		都市：小規模都市から世界規模の都市まで、分業、新来者と極貧者、よそよそしさ、西ヨーロッパ都市の大砲・馬車、都市の地理と都市関連、都市の序列 西ヨーロッパ都市の独自性—自由、近代性 大都市—脆弱だった国家、都市化
変動局面	経済社会の単位	交換	交換の下層階：小さな市、商店、行商人 交換の最上階：大市、海路、倉庫、取引所 市場経済
		資本 帝国	資本主義：資本・資本家・資本主義、土地と金銭、輸送、資本主義的企業、商業社会、独占、社会あるいは「全体集合」：階層制、国家、文明 ／社会／文明／戦争
出来事			大きな出来事：事件史、政治史 小さな出来事：雑事

出所：筆者作成

と都市と交通が、もっとも市場経済の時間幅である「変動局面」に近づいていく⁵⁷⁾。

5. 結びに代えて

これまでの議論を整理して、今後の課題を示すことで結びに代えたい。本稿では共同研究チーム「惑星社会と臨床・臨場の智」の主題の下に、惑星社会における社会変化を日常生活の諸相から探求しようような方法論の検討を課題とした。日常生活の次元に注意を払う重要性について、メルッチの運動論における動員と運動の論点から議論した。現代の社会運動は、世界を名付け意味付けることをめぐって展開しており、名付けと意味付けが産み出されるのが個々人の内面と「日常生活の網の目」であることを確認した。さらに考察を推し進めるために、ブローデルの時間層の議論を検討した。ブローデルは「全体史」という認識論の下に、「短い時間」

と「長い時間」を区別した。そして「出来事」「変動局面」「長期持続」からなる3つの時間層を議論したが、それら時間層の間においても内部においても相当の「厚み」を含んでおり、個別の調査研究に応じて分析者が時間層を再構成する必要があることを論じた。そしてブローデルの「日常性の構造」を「長期持続」のなかに位置付け、その時間層内部の構成要素の関連について仮説的な枠組みを提示した。

残された課題としては、日常生活の諸相を経験的に調査する際の方法論の具体的な提示である。地域社会研究における出来事と長期持続の関連を捉えるような方法論の検討は今後の課題としたい。またメルッチの日常性の議論とブローデルの日常性の構造の議論は、まだ十分に関連付けられているとは言い難い。本稿では、ブローデルの提起した「長期持続」を社会運動研究と地域社会研究に導入するための方向性を示したにとどまるため、さらに具体的な検討は今後の課題となる。

注

- 1) A. Melucci, *Culture in gioco: differenze per convivere*, (Milano: Ledizioni, 2010), p. 25.
- 2) 「私たちを唯一の惑星空間につなぐ消去不可能な結節点を認識することによってのみ、私たちはいくつもの異なった問いを発し、新たな出口の探究を始めることができる」(Ibid, p. 35).
- 3) 2016年3月30日、「臨床・臨場の智”の工房をいかにつくるか」というテーマの下に、共同研究チームのメンバーがかかわった近著3冊の合評会が開催された。共同研究チームの幹事である新原道信が編著となった『うごきの場に居合わせる』をめぐって、天田城介研究員は著作の特徴を「nascentをめぐる社会学」と評した。「3.11」以前の公営団地における調査研究をふりかえることを通じて、「未発の状態nascent state」であると同時に、「生まれつつある」ものとして、すでにそこに在った“うごき”に何度も立ち返る試みに着目した。またフィールドの行為者だけでなく、調査者自身にも焦点をあて、フィールドの関係性が不可逆的な配置換えと自己の変化(metamorphosis)を描くことになったことにも言及した。野宮大志郎研究員の編著による『サミット・プロテスト』をめぐって、可視的な抗議行動だけでなく、未だ言葉にならない「『ふつう人』の心の叫び」に迫ろうとした点が筆者(鈴木鉄忠)により指摘された。それに対して、構造のなかで人は、機械のように動かされるのではなく、agencyとして行為する創造的の局面があり、その“うごき”をどう捉えるのが課題となったと野宮研究員は答えた。天田城介研究員の編著による『大震災の生存学』をめぐって、「3.11」の前と後で「限界状況」に直面せざるをえなかった人々の「生の技法」に迫ろうとし、「生存」そのものが否定される構造的な力があるなかで、個々の生活のあり方を詳細に「数え上げる」試みがなされたことが議論された。

合評会の議論のなかで、主に以下の3点が共通の課題として析出されたと筆者は理解している。

- ①フィールドで出会う人々を「エスニシティ」「被災者」「運動家」などと言い表せない。帰属・所属・地位・役割の多面/多重/多面の自己(the multiple self)と揺れ動く自己(the playing self)をどう捉えるか、関係性のなかにある行為者(actor-in-the-relationship; attore-nella-relazione)の“うごき”をどう捉えるか。
- ②調査研究を進める上で、可視的な局面をどこに設定するのか。マクロトレンド(グローバル化、惑星社会のプロセス)とミクロな動向(個々人の心身の変化)にどのようにアプローチするのか。
- ③「限界状況」の体験者の内面に迫るとき、調査する側の存在理由もまた問われる。調査者がフィールドの当事者と切り結ぶ関係性(observer-in-the-field; osservatore-nel-

- campo) の“うごき”をどうふりかえることが可能であり、認識できるのか (A. Melucci, 1998, *Verso una sociologia riflessiva: Ricerca qualitativa e cultura*, (Bologna: Il Mulino, 1998), p. 22).
- 4) 本稿の題目は、以下のアルベルト・メルッチの着眼点に依拠している。「日常生活における数々の体験は、個人の生活の単なる断片に過ぎず、より目に見えやすい集会的な出来事からは切り離され、私たちの文化を揺るがすような大変動からも遠く隔てられているかのように見える。しかし、社会生活にとって重要なほとんどすべてのものは、こうした時間、空間、しぐさ、諸関係の微細な網の目のなかで明らかになる。この網の目を通じて、私たちがしていることの意味が作り出され、またこの網の目のなかにこそ、センセーショナルな出来事を解き放つエネルギーが眠っている」(A. Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, (New York: Cambridge University Press, 1996a) = 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 1ページ)。また「日常生活の網の目」という表現は、本稿の2で議論する社会運動研究の動員と運動の論点をめぐって、共同研究チームの新原道信と阪口毅の議論のなかで、新原からの示唆に基づく。
 - 5) 本節の議論の一部は、2016年10月7日に福岡市民センターで行われた「社会運動・集合行動研究ネットワーク」の第1セッション「社会運動の新しい理論・方法論」において、筆者が行った報告に基づいている。
 - 6) 筆者は動員と運動に以下の暫定的な定義をしている。動員とは、複数の行為主体を通じて利用可能な資源が組織化され、特定の争点にたいする現状変更を目的とした要求が公言される、期間限定の政治的・経営的プロセスである。動員局面では、社会的コンフリクト（同一の資源ないし価値の獲得をめぐる行われる相異なる二者以上の対立）が表面化される。運動とは、動員とは区別される恒常的な局面として、日常生活の網の目のなかに存在し、個人々人がおりなすネットワーク（社会関係のレベル）と個人のリフレクション（個人のレベル）のなかで進行中の社会文化的プロセスである。運動局面において、人びとは社会的世界の意味付けを行い、それを名付ける行為を行っている。
 - 7) メルッチの作品を理解するための時期区分については、鈴木鉄忠「3.11以降の現代社会理論に向けて—A.メルッチの惑星社会論への道行きを手がかりに」『中央大学社会科学研究所年報』第18号, 2014年を参照。
 - 8) A. Melucci, *Invenzione del presente: Movimenti sociali nelle società complesse*, (Bologna: Il Mulino, 1991[1982]), pp. 106-107.
 - 9) A. Melucci, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society* (Hutchinson Radius, 1989) = 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かずみ訳『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店, 1997年, 78ページ。
 - 10) A. Melucci, *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*, (New York: Cambridge University Press, 1996b), p. 116.
 - 11) Melucci, *ibid.*, 2000, p. 45.
 - 12) *Ibid.*, p. 33.
 - 13) 現代の社会運動が文化の次元で展開することについては、鈴木鉄忠「3.11以降の現代社会理論に向けて (3)—惑星社会におけるコンフリクト・社会運動・身体」『中央大学社会科学研究所年報』第20号, 2015年を参照。
 - 14) Melucci, *ibid.*, 2000, p. 45.
 - 15) *Ibid.*, p. 46.
 - 16) メルッチによれば、人間の行為は内面性の再定義のプロセスである。この点については、鈴木鉄忠, 前掲書, 2015年, 93-94ページを参照。
 - 17) 「日常生活の水面下の網の目」のなかで、いかにして名付けと意味付けが行われるかに関して、理

性的なコミュニケーションではなく、会話、談話、物語、議論というインフォーマルなコミュニケーションから検討したものとして、C. Sebastiani, G. Chiaretti, M. Rampazi, *Conversazioni, storie, discorsi. Interazioni comunicative tra pubblico e privato*, (Roma : Carocci, 2001)が興味深い。本書の存在を新原道信を通じて知った。

「個々人のレベル」で起こる名付けと意味付けの社会文化的プロセスの検討として、新原は「未発の社会運動」という概念を提起している。新原道信（編著）『「境界領域」のフィールドワーク―惑星社会の諸問題』に回答するために』（中央大学出版部、2014年）、50-51ページ。新原道信（編著）『うごきの場に居合わせる一公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』（中央大学出版部、2016年）、22-23ページ。

運動局面を調査研究する認識論・方法論として、本稿では十分に議論できないが、リフレクシヴな調査研究の錬成が行われている（Melucci, *ibid*, 1998. ; A. Melucci, “Verso una ricerca riflessiva”, registrato nel 15 maggio 2000 a Yokohama. = 新原道信訳「リフレクシヴな調査研究にむけて」新原道信（編著）、前掲書、2014年、93-103ページ）。

- 18) ブローデルの「全体史」についてはこれまで数々の議論が交わされてきた。そのなかでもポール・ブローデルが『ブローデル伝』の日本語版に寄せた論稿がとくに注意を引く（P. ブローデル「「全体史」について―日本語版への序文に代えて」P. デックス、浜名優美訳『ブローデル伝』藤原書店、2003年、i-xiiiページ）。
- 19) F. ブローデル、浜名優美訳『地中海 I 環境の役割』藤原書店、1991年、15ページ
- 20) F. ブローデル、山上浩嗣・浜名優美訳「長期持続」E. ル＝ロワ＝ラデュリ監修、A. ビュルギエール編集、浜名優美訳『叢書アナル 歴史の方法と対象 1958-1968 第3巻』藤原書店、2013年、11ページ。また次のイタリア語版も適宜参考にした。F. Braudel, “Storia e scienze social. La “lunga durata””, *Scritti sulla storia* (Milano : Tascabili Bompiani, 2003), pp. 37-72.
- 21) F. ブローデル、村上光彦訳『日常性の構造 I - 1』（物質文明・経済・資本主義 15-18世紀）みすず書房、1985年、5ページ。
- 22) F. ブローデル、村上光彦訳『日常性の構造 I - 2』（物質文明・経済・資本主義 15-18世紀）みすず書房、1985年、5ページ、326ページ。
- 23) F. ブローデル、松本雅弘訳『文明の文法 1』みすず書房、1995年、28ページ。
- 24) F. ブローデル、金塚貞文訳『歴史入門』中央公論新社、2009年、143ページ。
- 25) ブローデル、前掲書『地中海 I』、1991年、21-23ページ。
- 26) ブローデル、前掲書、2013年、40-51ページ。
- 27) 同書、39ページ。
- 28) 同書、40ページ。
- 29) 同書、41ページ。
- 30) ブローデルは「出来事」という用語がもつ意味の広がりには注意を喚起している。なぜならこの用語には、見方によっては「長期持続」の要素を認めることが多分にありうるからである。しかしブローデルは「細部に全体が宿る」という認識論にはたたない。あくまで出来事を「短期持続の中に組み込み、閉じ込めたいと考えている」として、「短い時間」として扱う（同書、40-41ページ）。
- 31) 同書、同上。
- 32) ブローデル、前掲書『日常性の構造 I - 1』、1985年、12-13ページ。
- 33) 同書、同上。
- 34) 同書、455ページ。
- 35) ブローデル、前掲書、2013年、43-44ページ。
- 36) ブローデルは『地中海』では百年単位の経済トレンドを含めているが、その後の「長期持続」論

- 文では半世紀の時間幅を最大限とみている。変動局面の時間尺度の設定がかわっている。F. ブローデル、浜名優美訳『地中海 III 集団の運命と全体のうごき 2』藤原書店、1993年、393ページ。
- 37) 同書、403ページ。
- 38) 同書、392-393ページ。
- 39) F. ブローデル、浜名優美訳『地中海 II 集団の運命と全体のうごき 1』藤原書店、1992年、13ページ。
- 40) ブローデル、前掲書、2013年、46ページ。
- 41) 1991年の第 1 回国際ブローデル学会の基調講演をまとめた論文集のなかで、長期持続が議論されている。カルロス・アントーニオ・アギーレ・ロハスは、「長期持続とは人間の歴史の〈内部において〉、歴史が発達するプロセスに沿って〈現在の本質的なファクターとして決定的な作用を及ぼし〉続けてきた構造的・現実的な諸原型の総体であり、歴史が大きな曲線を描いて動くなかで、現実すなわち関与的な諸要素として持続的に有効な機能を果たしてきた、より深い層の座標全体であり、緩慢に形成、変形、消滅する事実の構造あるいは組み合わせ」であり、「深層の歴史の説明と解釈を可能にする本質的なパラメーター」であると解している。そして長期持続を調査研究のなかで見出すためには、職人的な技量と経験を要すると述べている（カルロス・アントーニオ・アギーレ・ロハス、「長期持続と全体史」I. ウォーラーステイン他、浜名優美監修・尾河直哉訳『入門・ブローデル』藤原書店、2003年、20-21ページ）。
- 42) ブローデル、前掲書、1991年、21ページ。
- 43) 長期持続が「動きの反復」であるという点については、以下を参照した（Y. ラコスト、「地理学者ブローデル」I. ウォーラーステイン他、浜田道夫・末広菜穂子・中村美幸訳『開かれた歴史学 ブローデルを読む』藤原書店、2006年、266-267ページ）。
- 44) Y. ラコストはこの点を指摘している。「ブローデルが、長い時間、短い時間、そしてその中間の時間を区別したとしても、私が思うところ、彼は、それらがどう関係しあっているのかを理論化しようとはしなかった。『地中海』は、原則的にはこれら三つの時間のそれぞれに照応する三部で構成されている。しかし、そのことはのちに見るように、彼がこの三つの時間を頻繁に関係づけたことを意味しない。彼は経験的に、いわばケース・バイ・ケースで関係づけたのである」（ラコスト、前掲書、264ページ）。
- 45) 同書、49ページ。
- 46) 同書、同上。
- 47) なお引用文に続く文章は、日本語訳では「これはかつての—そして今後も—歴史学至上主義の陥りがちな過ちである」となる（同書、50ページ）。しかしイタリア語訳ではそれとは異なる意味の文章「すべてをひとまとまりに把握しているかどうか、常に問題となるのである（Il problema sta sempre nel cogliere tutto l'insieme）」が続く（Braudel, *ibid.*, p. 48）。フランス語版の底本を確認できていないため、どちらが正しいのかは判断できない。
- 48) ブローデル、前掲書、2013年、51ページ。Braudel, *ibid.*, p. 48.
- 49) ブローデルが出来事を「短い時間」として分析的に区別するのは、なぜその出来事が起きたのかという「説明」にあるように思われる。というのも、ある出来事が周期的に起こるのはなぜかに対する説明は、出来事の時間の層から十分にできないからである。当然ながら、出来事Aをそれ以前の出来事Bから因果的に説明することは可能である。しかしそれで説明が尽くされたわけではないとブローデルは考えている。なぜならば「出来事」とは違う時間層—長期持続や変動局面—を導入してはじめて、出来事の全体での位置付けが明確になるからである。
- この時間層の区別という点について、I. ウォーラーステインは次のように説明している。たとえば明治日本の「開国」、敗戦、復興などの出来事の連鎖だけの物語は、単に叙述しているだけか、島

国日本という本質論に陥る危険性をはらむ。もしブローデル的な視点にたてば、資本主義経済への日本の対応という経済システムの「変動局面」、さらには東アジア地域が長年にわたって存在してきたとされる地域システムの「長期持続」が視野に入る。これらの時間層を考慮に入れなければ、現在の出来事を理解することはできないと述べている。「明らかなのは、どのような時空パラメータのなかで現象を分析しようとするのかを決定しないかぎり、私たちは説明を持たないだけでなく、説明されるべき何ものをもつことさえないのだということです」(I. ウォーラーステイン, 山田鋭夫訳『『地中海』と日本』F. ブローデル, 浜名優美訳『地中海①』(藤原セレクション), 藤原書店, 1999年, xxivページ)。

ブローデルが提起している時間層の視点は、フィールドワークで目にする数々の出来事や雑事（一回性ないし周期性）の説明に際して、制度化されたものだけではなく、地域社会を構成する諸条件（山谷河海から心性まで）を想定して、もっとも妥当性を持つ説明要因を探す際のヒントになる。たとえば、北アドリア海圏のトリエステやイストリアにおいて、政治的境界線の移動によって故郷を喪失した人びとは、何に依拠してアイデンティティを立て直すかを理解しようとする、地域社会のなかでも長期に持続するもの（風景、食事、人間関係の結びつき方など）にしばしば行き着く。前近代の「歴史的地域」が故郷喪失者の地域形成の資源になる現実を理解する場合、国境線の移動という出来事や事件によっても持続していくものや当該地域の文化による抵抗を見出すことがある。どのような地域社会にも長期持続はあるはずであり、それらの時間層をどのように方法論のなかに組み込んでいくかが今後の課題となる。

以上の考察は、阪口毅とのメールを通じた議論に依っている。

- 50) 「要するに、1650年代のヨーロッパの世界＝経済とは、上は、オランダの社会のように、すでに資本主義的であった社会から、一番下の階段には、農奴制社会、奴隷制社会までが揃った、社会の併存、共存に他ならなかったのだ。この同時性、この共時性に、すべての問題がかかっている。実際、資本主義は、こうした規則的な段階性を糧として成長するのであり、外側の地帯が、中間地帯を、とりわけ中心地帯を養うのである。建物全体の頂点、資本主義という上部構造以外に、中心があり得ようか？ 中心が食料の供給を周辺に依存し、周辺は、中心に支配されながら、中心の需要に依存するという、相互性の光景が見える。結局のところ、西ヨーロッパは、古代奴隷制を新世界に、あたかも再発見であるかのように移植し、その経済的要請に従って、東ヨーロッパに第二次農奴制を『導入』したのである」(ブローデル, 前掲書, 2009年, 116-117ページ)。
- 51) 「ふつうに言われているのとは反対に、資本主義は、経済のすべてを、すべての活動社会をすっかり覆っているわけではない。資本主義は、それ自身の完璧たらんとするシステムの中に、それらをそっくり取りこんでしまうことは、決してできないのである。これまで述べてきた三領域一物質生活、市場経済、資本主義経済（加うるに、その膨大な付加物）一は、いまなお識別と説明のために、驚くほどの現代的な価値を持ち続けている」(同上, 139ページ)。
- 52) 「物質生活」「物質文明」「日常生活の構造」の領域はどのような原理で維持ないし再生産されているのか。この点について、ブローデルはそれほど明示的には述べていない。しかしながら経済の領域については、交換価値の有無によって物質生活の領域と明確に区別している。たとえば都市における市場は、それがどれほど小規模のものであれ、交換価値による取引が行われるがゆえに、すでに市場経済の領域が開始されていると見なされる。そうだとすれば「物質生活」の領域は、交換価値とは別の価値に基づいた原理が働いていると推測できる。ブローデルは、市場の外部で起こるゆえに統計的に計上されないやりとりとして、自給自足、物々交換、サービスの直接的交換、さまざまな内職、日曜大工などを挙げる。そこには贈与に基づく互酬原理、利害を度外視した共同性、ゲゼルシャフトではなくゲマインシャフト的な結合の原理、ソーシャルな結合の原理が働いていることが考えられる。交換価値が不在でも成立し続け、時間を通じて持続するならば、「物質生活」「物

質文明」「日常生活の構造」の領域内部に、ある種の共同性（communality）や社会的なるものの可能性を見出すことができるのかもしれない。この点については機を改めて考察したい。

- 53) ブローデル、前掲書、2009年、16ページ。
- 54) ブローデル、前掲書、1985年、12ページ。
- 55) 『物質文明・経済・資本主義』における地理性については、ラコストが指摘している（ラコスト、前掲書、256-257ページ）。
- 56) ブローデル、前掲書、2009年、25-26ページ。
- 57) 本稿では十分に論じられないが、ブローデルは都市と交通のなかで、人間によってつくられる「動く空間」という興味深い指摘をしている。「地中海に統一性があるのは、もっぱら人間たちの移動、その移動が前提とするつながり、移動を可能にする交通路によってである。〔中略〕 重要なのは、そのような交通網がどれほど人々の接近や首尾一貫した歴史を前提としているか、船や駄獣や馬車や人々の移動が地中海をいかなる点でひとつにしているか、またある観点からすれば、その土地固有のさまざまな抵抗があったにもかかわらず地中海をどれほど均一なものにしているかを見ることである。地中海という集合はそうした動く空間である」（ブローデル、前掲書、1991年、463ページ）。ラコストは地中海と地中海世界を区別し、後者の「空間＝動き」というブローデル的な地理把握に注目している（ラコスト、前掲書、265-269ページ）。